

小沢的場遺跡

事務所建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

群馬県勢多郡富士見村教育委員会

序

富士見村では、これまで主に県営は場整備事業に伴って南西部に位置する横室地区、米野地区、原之郷地区、あるいは南東部に位置する小暮地区、時沢地区などで発掘調査を行ってきました。しかし、近年では民間開発が活発化し、これに伴った発掘調査が増えております。

今回調査を行った小沢的場遺跡は、小沢地区では始めての発掘調査です。赤城白川の右岸に位置する小沢地区は、古くから赤城白川の洪水に悩まされてきました。古代から人々が暮らすには不適当な地域と考えられ、埋蔵文化財はないだろうと言われていました。群馬県遺跡台帳にはわずか1基の古墳だけが、この地区的遺跡として掲載されているに過ぎません。しかし、調査の結果、縄文時代、古墳時代、平安時代、中近世の遺構・遺物が検出され、多くの時代にまたがる複合遺跡であることが判明しました。今後周辺での調査事例が増えることにより、小沢地区の、ひいては富士見村の歴史の解明が徐々に進むものと思われます。

最後になりましたが、調査の主旨をご理解いただきご協力いただきました五箇一郎氏ならびに関係者各位、さらに、調査に従事していただいた作業員の皆様に心より謝意を表し、序といたします。

平成10年3月

富士見村教育委員会

教育長 浅井 多津男

例　　言

1. 本書は事務所建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は群馬県勢多郡富士見村大字小沢字的場555番地に所在する。
3. 調査期間は平成9年9月24日から平成9年10月4日である。整理作業は平成10年3月31日まで行った。
4. 発掘調査及び報告書刊行にかかる経費は、事業者である五箇一郎氏が負担した。
5. 発掘調査は富士見村教育委員会が実施した。調査体制は、教育長 浅井多津男、社会教育課長 品川良治、課長補佐 樽沢幹男、主査 羽鳥政彦（担当）である。
6. 本書の編集・執筆は羽鳥が行った。遺物実測、図版トレイス・版組は松津かほるが行った。
7. 発掘調査に係る資料は一括して富士見村教育委員会で保管している。
8. 発掘調査参加者は以下のとおりである。

木村利男 関口照子 奈良美江 松津かほる 本望充子

凡　　例

1. 遺構図方位記号は座標北を表している。
2. 描図縮尺は以下のとおりである。
全体図 1/300 穴住居跡・土坑 1/60 溝跡 1/160 1/80
遺物図版 1/3 (中国鏡は2/3)
3. 第1図は国土地理院発行1:25000地形図「波川」を用いた。第2図は富士見村役場発行1:2500原形図を1:5000に縮小し用いている。

目　　次

序文 例言 凡例 目次

I. 調査に至る経緯と調査の経過.....	1
II. 遺跡の位置と遺跡地の地形.....	1
III. 周辺の遺跡.....	2
IV. 発掘調査の方法.....	3
V. 土 層 堆 積.....	3
VI. 検出された遺構と遺物.....	4
(1) 概 要.....	4
(2) 穴住居跡.....	5
(3) 土 坑.....	5
(4) 溝 跡.....	7
VII. ま と め.....	9
抄録 写真図版	

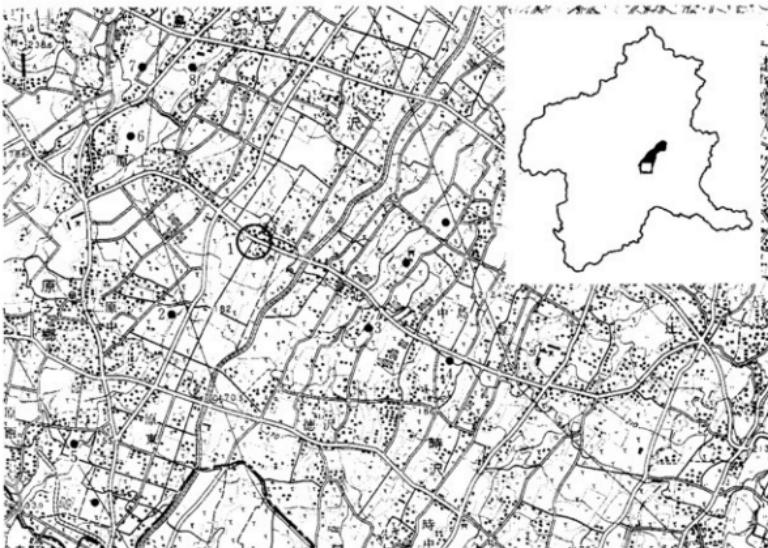
I. 調査に至る経緯と調査の経過

平成8年12月、開発協議審査委員会に五箇一郎氏より事務所及び倉庫の建設を行いたい旨の協議書が提出された。開発予定地周辺にはこれまで遺跡の存在は知られていなかったが、遺物散布調査を行ったところ、土器片、石器の散布が認められたため、審査会においてとりあえず試掘調査の必要がある旨意見を行った。平成9年1月、事業者より村教育委員会に調査依頼書が提出された。同年2月、試掘調査を行ったところ、古墳時代～平安時代と思われる遺構・遺物が検出された。この結果を受けて事業者と遺跡の保護について協議を行ったが、開発の意志が固いため、遺構・遺物が検出された事務所・倉庫部分を中心に、発掘調査を行い記録保存を図ることが合意された。

発掘調査は同年9月24日に着手した。調査面積が少なく、また、遺構・遺物の密度が少なかったこともありますり、10月4日には終了した。

II. 遺跡の位置と遺跡地の地形

調査地は、富士見村の中では南寄り（前橋市寄り）で中央部の小沢地区に位置する。富士見村役場のほぼ真南約1.1km、原小学校と時沢小学校を東西に結ぶ道路の南側に位置する。津久田停車場・前橋線（通称石井県道）の東方約0.9km、主要地方道前橋・赤城線（通称赤城県道）の西方約1.6kmの距離にある。



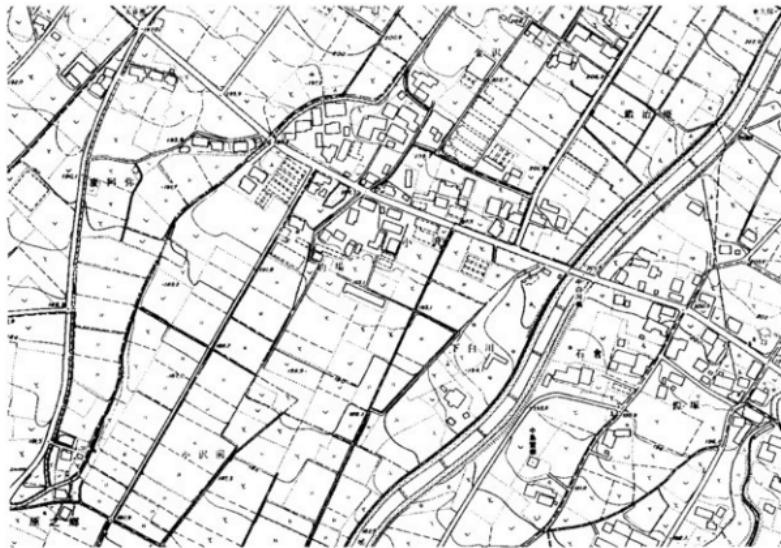
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡は赤城白川扇状地の西寄りに位置する。遺跡地周辺も扇状地形で、北東から南西へと伸びる細長い低台地と、台地に沿った低地が連続している。調査地は遺跡の中の南東端部に位置すると思われ、東側の台地との間の谷部に面している。東側台地のさらに東は幅100m程度の河川敷状の低地となっており、この低地の東端、調査地から約250mの距離に、現在の赤城白川が緩やかに蛇行しながら流下している。遺跡の南方約500mまでは台地が続くが、その南には広大な赤城白川の氾濫原が広がる。

III. 周辺の遺跡

調査地周辺ではこれまでほとんど発掘調査が行われていない。富士見村では遺物の詳細散布調査が行われていないため、遺跡の所在状況も不明な地区が多い。本調査地の乗る低台地上、あるいは周辺の台地上にも遺跡の存在が予想されるが、富士見村誌や群馬県遺跡台帳にも記載は少ない。恐らく、赤城白川の度重なる洪水の影響により、遺跡地がその氾濫土に覆われていることも一因であろう。

赤城白川を挟んで本跡の東方約0.3km～0.5kmには「時沢古墳群」があったが、大半は耕作などにより削平され、墳丘が認められるのは現在では数基だけである。富士見村誌編さんの際に群馬大学で行った調査以後全く調査は行われていない。既調査地では本跡の南西約0.5kmには本年度調査を行った原之郷鰐沢遺跡(第1図2)があり、平安時代の集落が検出されている。南東0.7kmにはやはり今年度調査を行った時沢中谷遺跡(同図3)があり、奈良・平安時代の住居を調査している。さらに、その東方0.4kmには前年度に調査を行った時沢猿遺跡(同図4)があり、江戸時代の屋敷跡を調査している。距離は若干離れるが、南西約1.5kmには



第2図 周辺の地形

平成7・8年度に調査を行った旭久保遺跡（同図5）がある。縄文時代中期前半～中葉を中心とする遺物包含層、古墳～平安時代の集落（竪穴住居跡約100軒、掘立柱建物跡約50棟等）を検出しており、本年度も古墳時代の住居跡1軒と中世の溝跡を調査している。北西方約0.8kmには昭和62年度に調査を行った久保田遺跡（同図6）があり、縄文時代前期初頭の集落、古墳～平安時代の集落等を調査している。さらにその北方には同年に調査を行った由森遺跡（同図7）があり、縄文時代前期の集落と平安時代の集落を調査している。またその東方の白川遺跡（同図8）では縄文時代前期・後期の住居跡と古墳時代及び平安時代の集落を検出している。

IV. 発掘調査の方法

まず発掘調査対象地の表土を重機により排除したが、北半部では試掘調査で想定した位置に遺構が検出されなかつたため、浅間C軽石を含む黒色土層～ローム漸移層までを排土した。南半部は基本的に耕作土だけを排除した。この後、人力により遺構の検出作業、各遺構の精査を行った。

遺跡、遺構の位置を記録するため、国家座標に基づき5m方眼を組み、南東杭でグリッドを呼称した。

実測は遺構平面図は平板実測を行い、基本的に住居跡・土坑等は1/20、溝跡は1/40で行った。土層断面・断面は1/20で実測した。写真撮影は白黒、カラースライドとも35mm版で記録した。

V. 土層堆積

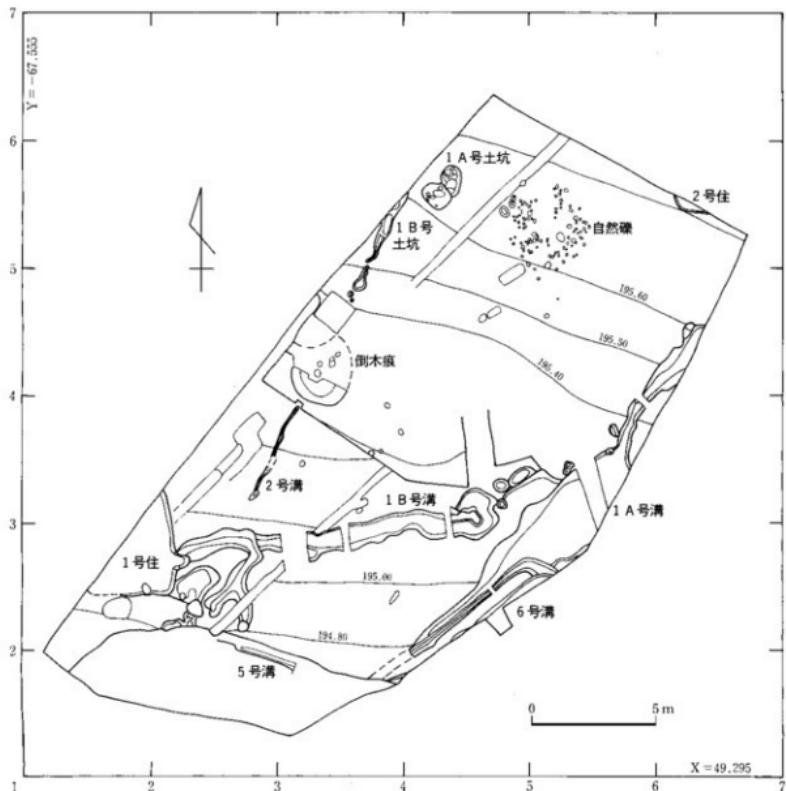
本村の一般的な土層堆積は、関東ローム層の上に黒ボク土、淡色黒ボク土、C軽石を含む黒色土、黒褐色土が堆積する（但し、黒ボク土の堆積は通常高標高の地帯のほうが厚い。）が、低標高に位置する台地上は後世の耕作などにより堆積土層が激しく削平されていることが多い。

本調査地は赤城白川扇状地に位置している。この扇状地上にも様々な遺跡が展開しているが、地点によって、離水年代が異なり、また、離水後に受けた自然の、あるいは耕作等の人为的な行為により、土層の堆積も様々である。本調査地の表土（耕作土）は、多量の砂粒を含む暗褐色土で、赤城白川の洪水の影響を受けていることが確認できる。表土の下にはすぐC軽石を含む薄い黒色土が現れる。その下はローム漸移層で黒ボク土は未発達である。この下は基本的にローム層となるが、調査区北半部の検出面の状況からも明らかのように、地点により疎密はあるが、最上層には人頭大以下の砂礫層が堆積し、それ以下も黄色、茶色、あるいは青灰色の砂を含んで、互層状に堆積しており、ロームが堆積する時期にも頻繁に赤城白川の影響を受けていたことが窺われる。掘削が浅いこともあるが、今回の調査ではAs-YP、As-SP、As-BP等を確認することはできなかった。

VI. 検出された遺構と遺物

(1) 概 要

小沢的場遺跡から検出された遺構は、縄文時代の土坑1基、古墳時代の溝1条、平安時代の竪穴住居跡1軒、時期不明の竪穴住居跡1軒、戦国時代の溝1条、時期不明の土坑・溝・柱穴である。この他に縄文時代と推定される倒木痕が2基並んで検出されている。遺物は各時代の遺構から少量出土している。



第3図 小沢的場遺跡調査区全体図

(2) 穹穴住居跡

1号住居跡

調査区の南西端に位置する。1B号溝を切り込んで構築している。

西北半部は調査区域外である。東西は現況で3.4m、南北は4.1mを測る。深さは北端で約30cmを測り、南壁西半部は床面まで削平されている。東壁は若干角度をもって立ち上がる。床面は中央部が周縁よりも凹んでいる。カマド前面から中央部にかけては堅緻であるが、壁際は軟弱である。カマドは東壁の南寄りに付設されている。燃焼部の大半が壁外に位置するタイプで、右側袖石が残存する。壁外への張り出しは、長さ約70cm、幅60cmを測る。カマド及びカマド左右の東壁面はローム粘土で補強されている。カマドから前面にかけては崩落したローム粘土で厚く被われていた。南東隅に径約60cm、深さ5cmを測り、ほぼ円形を呈する浅い土坑が付設されている。また、南西隅にも壁から若干距離を置いて、径約60cm、深さ20cmで円形を呈する土坑が検出されており、底面の西寄りにさらには浅いピットが穿たれている。北東隅寄りに検出されたピットは径40cm、深さ20cmを測る。中央部から南壁にかけての床面から、最大で長さ40cmを超える大小の礫が出土した。土器は南東土坑の上方覆土中から、刻線のある須恵器の环が出土している。カマド焚口からも須恵器の环、東壁寄りの床面密着で須恵器小型壺、墨書きのある須恵器の环破片が出土した。南西隅の土坑から出土した灰釉陶器の碗には、カマドから出土した破片が接合している。住居の時期は出土遺物から平安時代（9世紀後半）と思われる。

2号住居跡

調査区の北東端に位置する。南西端部だけの検出であり、大半は調査区域外である。

東西1.6m、南北0.7mの範囲を調査した。深さは検出面から約10cm程度である。

遺物は出土しておらず、時期不明である。

(3) 土 坑

1A号土坑

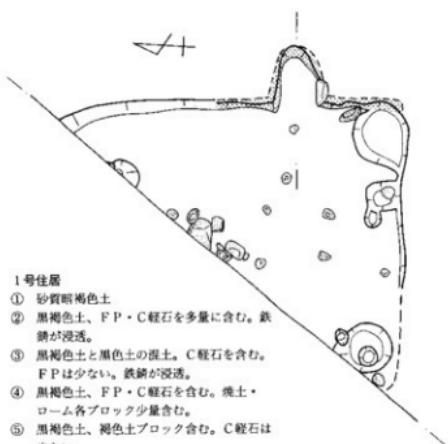
調査区の北端部に位置する。1B号土坑が南側に重複する。内部に自然礫が露出する。

径約80cm、深さ20cmを測り、円形を呈する。礫を挟み南側にも掘り込みが続くが、本跡との関係は明瞭ではない。覆土は挟雜物の少ない、にぶい褐色土である。遺物は、覆土上層から土器破片1点が出土しただけである。土坑の時期は遺物および覆土から繩文時代後期の可能性がある。

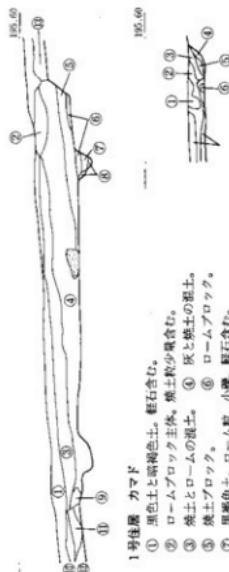
1B号土坑

調査区の北端部に位置する。1A号土坑が北側に重複する。

長軸1.1m、短軸0.9mを測り、隅丸長方形状を呈する。深さは約45cmを測る。地山の礫が露出し、覆土中にも多数の礫が落ち込んでいる。覆土は余り締まりのない暗褐色土が堆積する。遺物は覆土下層から馬の蹄鉄が1点出土している。土坑の時期は不明瞭であるが、比較的最近のものと思われる。

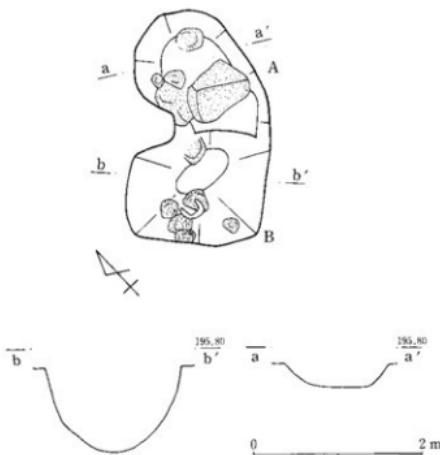


- 1号住居
 ① 砂質褐色土
 ② 黒褐色土、FP・C軽石を多量に含む。鉄
錆が浸透。
 ③ 黒褐色土と褐色土の混土。C軽石を含む。
 ④ 黒褐色土、FP・C軽石を含む。焼土・
ローム各ブロック少量含む。
 ⑤ 黒褐色土、褐色土ブロック含む。C軽石は
少ない。
 ⑥ 黒色土、C軽石は少ない。
 ⑦ 暗褐色土、軽石ほとんど含まない。
 ⑧ にじい黄褐色土、挟雜物ほとんどない。
 ⑨ C軽石を含む黒色土に褐色土ブロック。
 ⑩ C軽石を含む黒色土。鉄錆が浸透。
 ⑪ 黒色土、C軽石を含む。
 ⑫ にじい褐色土。
 ⑬ C軽石を多量に含む黒色土。

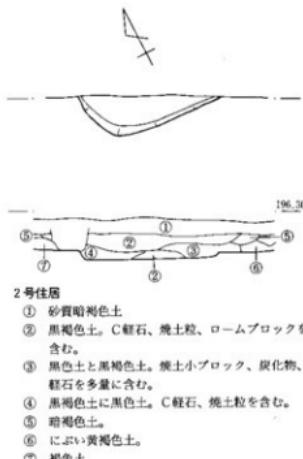


- 1号住居 カマド
 ① 黒色土と褐褐色土、軽石含む。
 ② ロームブロック土体。焼土粒少観察した粗土。
 ③ 烧土とロームの混土。
 ④ 烧土ブロック。
 ⑤ ロームブロック。
 ⑥ 黑褐色土。ローム塊、小礫、軽石含む。

第4図 1号住居跡



第5図 1A・B号土坑



- 2号住居
 ① 砂質褐色土
 ② 黒褐色土、C軽石、焼土粒、ロームブロックを
含む。
 ③ 黒色土と黒褐色土。焼土小ブロック、炭化物、
軽石を多量に含む。
 ④ 黒褐色土に黑色土。C軽石、焼土粒を含む。
 ⑤ 黄褐色土。
 ⑥ にじい黄褐色土。
 ⑦ 褐色土。

第6図 2号住居跡

(4) 溝 跡

1 A号溝

調査区の東端部を北東から南西方向に流下している。途中から1 B号溝が分岐する。また、南端で6号溝と重複するが、新旧関係は不明である。長さ約17mの範囲を調査した。幅は最小で約0.4m、最大では2.4m以上を測り、一定していない。特に南半部で急激に幅を広げている。覆土下層には多量の砂礫が混入しており、流水のあったことが確認される。遺物は北半部から須恵器の鉢、土師器の壺が出土している。溝の時期は、出土遺物から古墳時代の終わり頃と思われる。

1 B号溝

1 A号溝から分岐し、ほぼ東から西へ流下する。西端で一段深くなり、再び南西方向へ分岐（1 C号溝）し、さらに分岐した溝が、南方向に分岐（1 D号溝）する。1 C・1 B号溝は崖端の手前で収束する。1 B号溝の先端は1号住居跡により削平されており、区域外に伸びるかどうか不明である。1 B号溝と1 C号溝の間には梢円形を呈する浅い土坑状の落ち込みが検出されており、位置的な状況や覆土から本跡に関係すると思われるが、機能等不明である。この落ち込みの南側には流水痕が認められるが、方向から見ると、2号溝に伴う可能性が強い。1 A号溝との分岐点から先端まで長さ約14.5mを測る。幅は中央部から西側は約80cm前後でほぼ一定している。1 C・1 D号溝は幅50cm前後を測る。深さは西端部で最大30cmである。1 A号溝と同様に覆土中には多量の砂礫が含まれており、用水路としての機能が考えられる。遺物は1 B号溝の中央部から土師器の壺が出土しており、1 A号溝同様に古墳時代に属すると思われる。

2号溝

調査区の西端に位置し、北北東から南南西方向に流下する。調査区北半部は検出面までの掘削が深い為、途切れ途切れに検出されており、流水痕だけが残存する部分もある。幅も一定していないが、南半部は20cm前後とほぼ一定している。深さは南半部で10cm前後、流水痕では20~30cmの部分もある。覆土の大半は砂礫である。前項で記したとおり、1 B号溝の南に検出された流水痕は本跡に伴う可能性がある。遺物は中央部に位置する流水痕の砂層中から中国銭（政和通宝 初鋤西暦1111年）が1点出土している。溝の時期の詳細は不明であるが、中国銭が出土した事から、鎌倉～室町時代と思われる。

5号溝（南端落ち込み）

調査区南端の落ち込みの崖下の縁に沿って検出されている。検出範囲の中央から始まり東側に伸びているが、部分調査のため詳細は不明である。この落ち込みの底面は平坦であり、人為的に掘削された可能性がある。覆土下層は砂粒、ロームブロックを含む黒褐色土が堆積しており、洪水層の可能性がある。また、上層は耕作土であり、水田として利用されていたものと思われる。遺物等は出土しておらず、また、軽石層の堆積も認められないことから、時期は不明である。

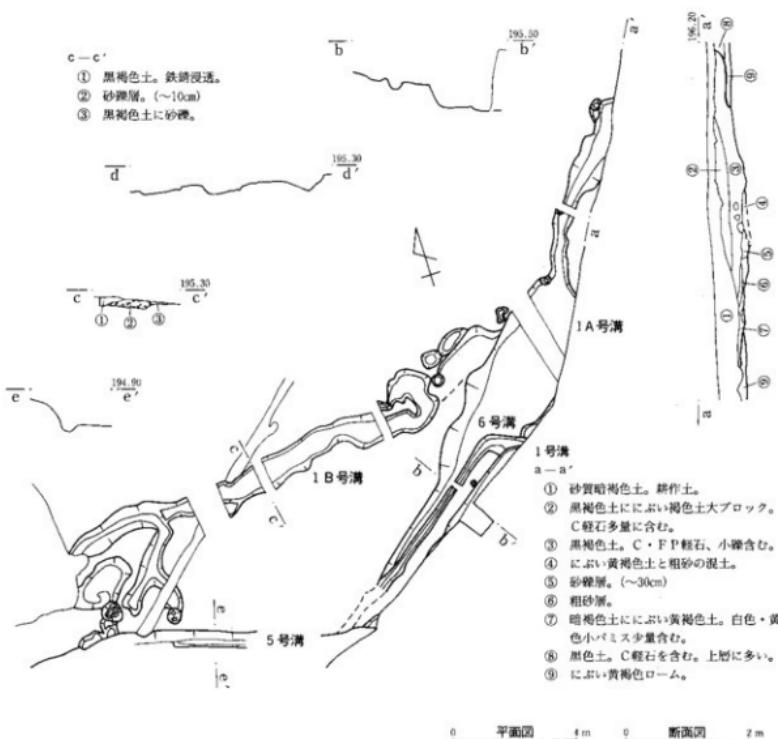
6号溝（及び南東端落ち込み）

1 A号溝の南端部に位置する。1 A号溝との新旧関係は不明であるが、覆土の状況からは本跡が新しいと思われる。ほぼ1 A号溝の走向に沿って掘削され、北東端で直角に近く走向を変える。長さ約8mの部分が

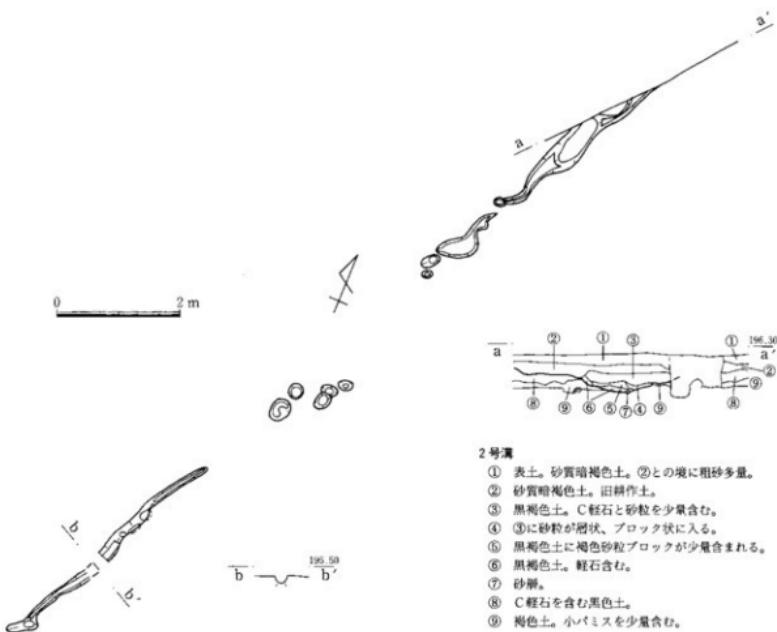
検出され、南西端は調査区南端の落ち込みで消滅する。幅は30cm前後で、北東部は広くなる。深さは20cm前後を測る。東側には南東端部の落ち込みが重複するが、南東の調査区域外に伸びている様相が窺われる。覆土は黒褐色土、ロームブロックを含む暗褐色土である。遺物は出土していない。

南東端部の落ち込みは6号溝と平行している。調査した範囲内（トレンチによる拡幅部）では、底面は平坦で、壁面も直に立ち上がるところから、人為的なものと思われる。遺物は出土していない。

6号溝、南東端落ち込みとともに性格が不明瞭であるが、耕作に伴う区画と考えている。時期的には近接した構築時期が考えられるが、新旧関係とともに不明である。



第7図 1・5・6号溝

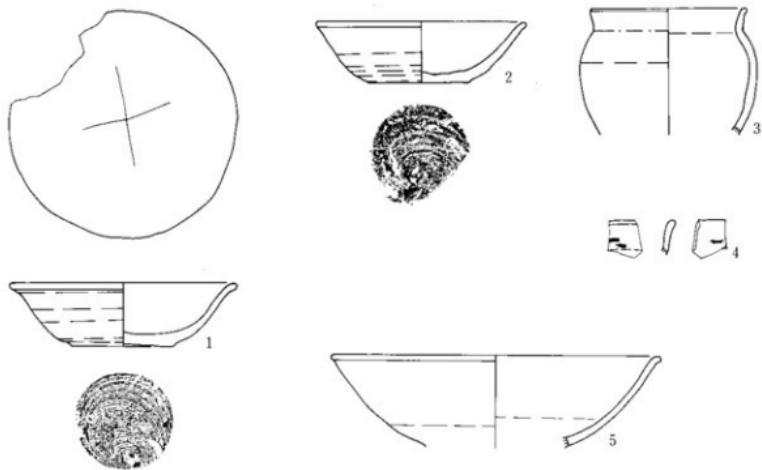


第8図 2号溝

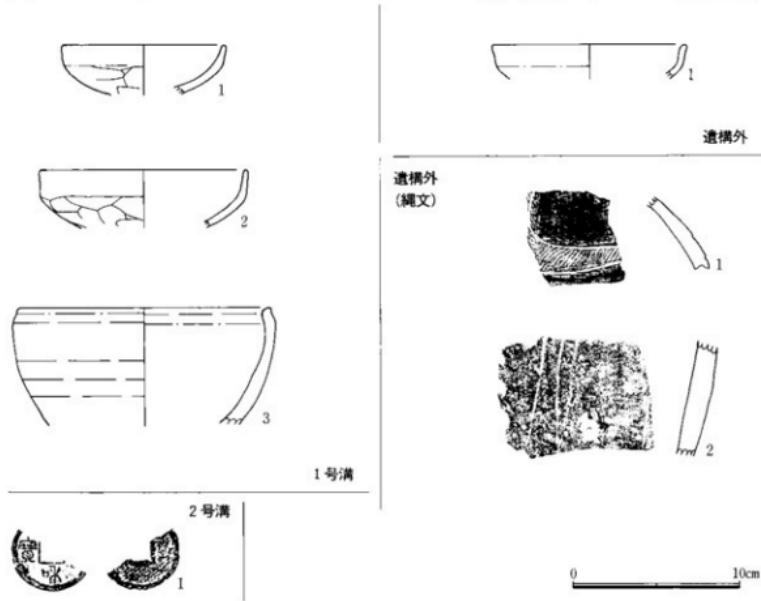
VII. まとめ

小沢的場遺跡から検出された遺構は、平安時代の堅穴住居跡1（2）軒と古墳時代・中近世の溝跡・時期不明の溝跡・土坑とわずかであり、遺物の量も少なかった。しかし、現在の赤城白川の右岸に位置する小沢地区は、富士見村の中でも埋蔵文化財包蔵地のもっとも少ない地区の一つと考えられており、今回の発掘調査によって遺跡の存在が確認された意義は大きい。また、単に遺跡の存在が確認されたというだけでなく、縄文時代・古墳時代・平安時代・中近世と多岐にわたる複合遺跡であるという点も重要である。

先述したとおり、富士見村では詳細散布調査を行っていないため、遺跡の所在状況の不明な地区も多いが、今回的小沢的場遺跡の発掘調査を契機に改めて周辺の地形を概観してみると、調査地付近から南方の広大な地域は白川の氾濫原と認められ、集落遺跡の存在はほとんど望めない（水田・低湿地遺跡の可能性はある）ようであるが、西方あるいは北方には旧河川と思われる幾筋もの低地と、比高差は少ないものの低地に挟まれた台地が連続しており、これら台地上には集落遺跡等が存在する可能性が高い。いずれにしても、今後、諸開発事業に伴って発掘調査を積み重ねていくことによって、遺跡の存在が希薄であるといわれてきたこの地区的実態も、次第に明らかになっていくものと思われる。



1号住居跡



第9図 出土遺物

小沢の場遺跡出土遺物観察表

1号住居跡

番号	種別 器種	出土位置 残存状況	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	須恵器 环	南東土坑 一部欠損	口：13.7 底：6.1 高：3.9	粗粒多量、小粒 淡黄色～黒褐色	内外面とも回転ナデ。底部右回転糸切り未調整。底部内面に焼成後「×」を刻畫。	還元炎焼成 底部に黒斑 焼成普通
2	須恵器 环	カマド焚口 一部欠損	口：12.7 底：5.1 高：3.2	砂粒、小粒 橙色～黒褐色	内外面とともに回転ナデか？ 底部右回転糸切り後調整？	酸化炎氣味 焼成不良
3	須恵器 小盤	東壁周床直 1/5(口1/3)	口：9.4 胸：10.7	黑色粒多量 灰色	口縁部は短く、直線的にやや外傾する。 内外面とも回転ナデ。	還元炎焼成 焼成普通
4	須恵器 环 ？	床直 小破片		砂粒 灰白色	内外面とも回転ナデか？ 内外面に墨書き、文字不明。	還元炎焼成 焼成普通
5	灰釉陶器 碗	カマド・南西 土坑 1/4(口1/3)	口：19.9	緻密 灰白色～灰色 輪オーリーブ灰色	口縁端部は強く外反する。 外面回転ヘラケズリ。内面回転ナデ。 輪は刷毛塗り。	

1号溝

番号	種別 器種	出土位置 残存状況	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	土師器 环	4—6杭周辺 1/8	口：(9.9)	砂粒 にぼい褐色	内面と口縁部外面ヨコナデ。外面底部～体部へラケズリ。	焼成普通
2	土師器 环	3—3杭東側 1/3	口：12.5	粗砂粒 橙色	内面と口縁部外面ヨコナデ。外面底部～体部へラケズリ。	焼成普通
3	須恵器 鉢	4—6杭周辺 1/4	口：15.1	砂粒、黑色粒 灰白色	口縁部は短く内傾する。 内外ともに回転ナデ。	還元炎焼成 焼成普通

2号溝

番号	種別	出土位置	法量(cm)	説明	明
1	銅 鉄	流水槽中	径：1.9	1/2残存。政和通宝(初詣西暦1111年)。篆書。	4—4グリッド

遺構外

番号	種別 器種	出土位置 残存状況	法量(cm)	胎土・色調	器形・成・整形の特徴	備考
1	土師器 环	遺構外 1/6	口：12.0	細砂粒 橙色	内面と口縁部外面ヨコナデ。底部～体部外面へラケズリ。	焼成普通

遺構外出土遺物(縦文)

番号	器種	出土位置	文 様	等	備考
1	注 口 ?	1号土坑北側	沈縁で区画し、沈縁内にLRを充填する。区内には丁寧なミガキを施す。 内面は刷毛状工具で雜なナデを施す。		瓶之内日式期
2	深 鉢	1号溝	縦位の沈縁が垂下する。器面が荒れて不鮮明であるが、地文無文か？		瓶之内式期か？

発掘調査報告書抄録

フリガナ	オザワマトバイセキ
書名	小沢的場遺跡
副書名	事務所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	羽鳥 政彦
編集機関	群馬県勢多郡富士見村教育委員会
編集機関所在地	〒371-0114 群馬県勢多郡富士見村大字田島866-1 ☎027-288-6111
発行年月日	西暦1998年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 市町村	東経 遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
オザワマトバイセキ 小沢的場遺跡	勢多郡富士見村 大字小沢字的場	10303		36°26'31"	139°04'47"	19970924 ↓ 19971004	345m ²	事務所建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小沢的場遺跡	集落	古墳 平安 中近世 時期不明	溝跡 竪穴住居跡 溝跡 溝跡・土坑	1条 2軒 1条 土師器・須恵器 須恵器・灰釉陶器 中國銭	



1. 小沢の場遺跡全景（南から）



2. 1号溝など（東から）



1. 1号住居跡（西から）



2. 同左南東部（東から）



3. 2号住居跡（南から）



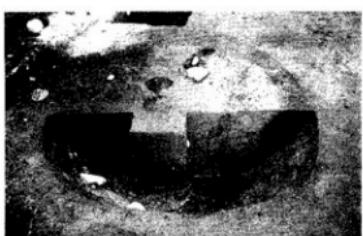
4. 1号溝土層堆積状況（東から）



5. 2号溝（北から）



6. 2号溝検出状況（東から）



7. 倒木痕（南から）



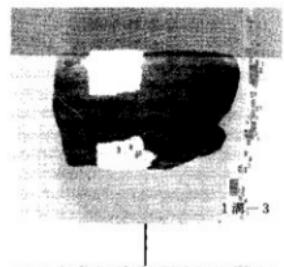
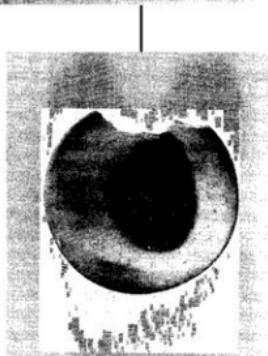
8. 作業風景



1住-1



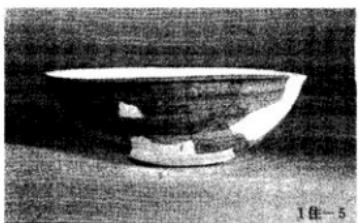
1住-2



1酒-3



1住-30



1住-5



1酒-2



1酒-1
（續文）

小沢的場遺跡

事務所建設に伴う埋蔵
文化財発掘調査報告書

平成10年3月18日印刷
平成10年3月25日発行

編集・発行／群馬県勢多郡富士見村教育委員会
群馬県勢多郡富士見村大字田島866-1
電話（027）288-6111

印 刷／朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社